『比較論理学研究』第6号
広島大学比較論理学プロジェクト研究センター
研究成果報告書 (2008)

アビナヴァグプタ*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*の研究（1）*

川尻洋平

0. はじめに

本稿は、シヴァ一元論を奉じるカシュミールのシヴァ教の一派である再認識派の論書、アビナヴァグプタ（Abhinavagupta, ca. 975–1025）著*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*の帰敬偈部分の再校訂テキストを提示し、バースカラカンタ（Bhāskarakaṇṭha, 18世紀）の*Bhāskarī*に依拠した翻訳を提示するものである。さらに今後の研究において、作者不詳の注釈*Īśvarapratyabhijñāvimarśinīvyākhyā*の校訂テキストを作成しそれに基づく解釈を提示するために、本稿では*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*の第1偈に対応する*Īśvarapratyabhijñāvimarśinīvyākhyā*のトランスクリプトのディプロマティックエディションを提示する。

再認識派は、シヴァ一元論の伝統に属するトリカ（Trika）に哲学的基盤をもたらした一派である。トリカは、伝統的に「シヴァの方法」（śāmbhavopāya）「シャクティの方法」（śāktopāya）「個我の方法」（āṇavopāya）という三つの方法を解脱の手段としていた[1]。「個我の方法」とは、「私は身体からなるものである」などの誤った概念構想（vikalpa）を浄化（saṃskāra）するために、神格の観想（dhyāna）などに依る方法である。「能力の方法」とは、「私は身体からなるものである」という捨てられるべき（heya）概念構想と「私は身体からなるものではない」という取るべき（upādeya）概念構想の弁別という思択（tarka）を通じて捨てられるべき概念構想を浄化し、取るべき概念構想を疑いえないものとし、さらにそれを最終的に非概念的な知に転換する方法である。この方法は、「個我の方法」とは異なり、観想などの手段に依らず論理的思考を突き詰める方法である。「シヴァの方法」とは、全世界がシヴァから生起し、そこに映しだされ、再びそこに帰滅するのを直証する方法である。この方法は最高の方法とされる。

「シヴァの方法」を行うひとは、このような非概念的な一体化（samāveśa）を繰り返すことによって生前解脱を得るのである。「個我の方法」と「能力の方法」がそれぞれ、「能力の方法」と

*写本資料の複写を許可してくださった以下の研究所および図書館関係各位にこの場を借りて謝意を表したい。Government Oriental Manuscript Library, Ganganatha Jha Kendriya Sanskrit Vidyapeetha、Bhandarkar Oriental Research Institute、Staatsbibliothek zu Berlin、Akhila Bhāratīya Saṃskṛt Pariṣad、Tagore Library、Indira Ghandhi National Center for the Arts、Sri Ranbir Research Institute。またアラハバードの写本については九州大学の片岡啓先生に提供いただき、ベルリンの写本については京都大学の Werner Knobl 先生のお世話になった。*Īśvarapratyabhijñāvimarśinīvyākhyā* のトランスクリプトについては、Roma 大学の Raffaele Torella 先生、立正大学の戸田裕久先生に提供いただいた。この場を借りて謝意を表したい。

[1] これら三つの方法については高島 [1986] を参照せよ

「シヴァの方法」というより高次の方法へ到達する手段であるのに対して、「シヴァの方法」は解脱を得る直接的な手段である。

アビナヴァグプタは、トリカの体系をまとめた*Tantrāloka*において、これら三つの方法に「僅かな方法」(anupāya) を加えた。しかしこれは「シヴァの方法」と実際上の違いはなく、「シヴァの方法」のより高次のものが「僅かな方法」といわれる。「僅かな方法」とは、師の一言、一連の議論、あるいは聖典に対する信頼によって頓悟する方法である。再認識派の論書の学習は、伝統的にこの「僅かな方法」に相当する。「僅かな方法」には、「私はかの主宰神に他ならない。認識し行為をするものであるから」という再認識派の主張の証明と反対主張の論駁という一連の議論を通じた無知の除去が必要とされる。したがって、再認識派の論書である*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*は、上記の再認識派の主張の証明とそれに対する反対主張の論駁から構成される。

1. 再認識派の主要な著作

*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*は、アビナヴァグプタの直接の師ラクシュマナグプタ (Lakṣmaṇagupta, ca. 950–1000) の師ウトパラデーヴァ (Utpaladeva, ca. 925–975) 著*Īśvarapratyabhijñākārikā*に対する注釈である。ウトパラデーヴァは、師ソーマーナンダ (Somānanda: ca, 900–950) 著*Śivadṛṣṭi*の内容を反映させる形で*Īśvarapratyabhijñākārikā*を著し、その趣旨を明らかにするために自注*Īśvarapratyabhijñākārikāvṛtti*を著した。この自注は韻文作品である*Īśvarapratyabhijñākārikā*の韻文上の制約に伴う構文解釈の難点を補うために著されたものである。したがって、ウトパラデーヴァは*Īśvarapratyabhijñākārikāvṛtti*において*Īśvarapratyabhijñākārikā*の一語一語を取り上げて註釈していない。さらにウトパラデーヴァは*Īśvarapratyabhijñāvivṛtti*を著し、その著作において、一つの偈頌に対して様々な解釈を与え、派生的な議論を展開している。ウトパラデーヴァの孫弟子にあたるアビナヴァグプタは、*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*の他に、ウトパラデーヴァの*Īśvarapratyabhijñāvivṛtti*に対する注釈として*Īśvarapratyabhijñāvivṛttivimarśinī*を著した。アビナヴァグプタは、この著作において*Īśvarapratyabhijñākārikāvṛtti*に対しても詳細な注釈を与えている。またこの作品では、*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*では他論書からの引用が限られているのに対して、他論書からの引用が多くみられる。中でも、ダルマキールティ (Dharmakīrti: ca. 600-660) の*Pramāṇavārttika*をはじめとする仏教論理学派の論書や、バルトリハリ (Bhartṛhari: 5世紀) の*Vākyapadīya*からの引用を豊富に含んでいる。

再認識派の主要作品は、*Īśvarapratyabhijñākārikā*、*Īśvarapratyabhijñākārikāvṛtti*、*Īśvarapratyabhijñāvivṛtti*、*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*、*Īśvarapratyabhijñāvivṛttivimarśinī*というこれら五つの著作によって構成される[2]。

[2]このことはマドゥラージャ (Madhurāja) の*Śāstraparāmarśa*において次のように述べられている。*Śāstraparāmarśa* 4: sūtraṃ vṛttir vivṛtir laghvī bṛhatīty ubhe vimarśinyau / prakaraṇavivaraṇapañcakam iti śāstraṃ pratyabhijñāyāḥ // (「スートラ、注、詳注、短編長編という二つの考察、[*Śivadṛṣṭi*という] 論書に対する [これら] 五つの注釈が再認識に関する論書である。」) Torella[1988: 137, fn.1] によれば、*Śāstraparāmarśa*の写本はマドラスの Government Oriental MSS Library にある。

2. *Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*とその注釈について

アビナヴァグプタの著作である*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*の特徴は、*Īśvarapratyabhijñākārikā*の帰敬偈に対する注釈において顕著である。ウトパラデーヴァは、*Īśvarapratyabhijñākārikā*の帰敬偈の趣旨を自註において次のように述べる。

> ĪPKV1.1.1: parameśvaraprasādād eva labdhātyantadurlabhataddāsyalakṣmīr aham ekākisaṃpadā lajjamāno janam apīmam akhilaṃ svasvāminaṃ vakṣyamāṇopāyena pratyabhijñāpayāmi yena tasyāpi paramārthalābhena parituṣyeyam //
>
> 「まさに最高主宰神の恩恵（prasāda）に基づいて、とても得難い彼［最高主宰神］への隷属による幸福を獲得した私は、独りだけの達成を恥じて、ここなるすべての人にも、彼ら自身の主［最高主宰神］を以下に述べる手段によって再認識せしめる。そのことによって、彼らも究極的真理を獲得することに私は満足するだろう」

自註に基づけば、帰敬偈は次のように読むことができる。

> ĪPK1.1.1: kathaṃcid āsādya maheśvarasya dāsyam janasyāpy upakāram icchan /
>
> samastasaṃpatsamavāptihetuṃ tatpratyabhijñām upapādayāmi //
>
> 「[あらゆる至福を獲得する根拠である（samastasaṃpatsamavāptihetu)］大主宰神への隷属（dāsya）を、何らかの方法で獲得して、人々にも扶助（upakāra）を与えようと望んで、あらゆる至福を獲得する根拠である（samastasaṃpatsamavāptihetu）その［大主宰神の］再認識を私は可能にする」

これに対してアビナヴァグプタの注釈は、次のような解釈を与える。

> 「あらゆる至福の獲得の根拠である(samastasaṃpatsamavāptihetu)大主宰神への隷属を何らかの方法[恩寵、あるいは師への帰依][3]で、完全に獲得した直後に、[ウトパラ自身だけでなく]人々にも何らかの方法[恩寵、あるいは師への帰依]で、それを再認識せしめる手段を完全に獲得せしめて、あらゆる至福の獲得の根拠である(samastasaṃpatsamavāptihetu)

[3]「何らかの方法」(kathaṃcit) という語にアビナヴァグプタは二つの解釈を与えている．アビナヴァグプタによれば，恩寵と主宰神に他ならない師への帰依である．See ĪPV I p. 26, 3–27, 4: sa cāyaṃ dvitīyaḥ kāryakāraṇabhāvo laukikānvayavyatirekasiddhaprasiddhakāryakāraṇabhāvavilakṣaṇatvāt sphuṭena rūpeṇāsaṃcetyamānaḥ kādācitkavastusadbhāvonneyaparamārthaḥ atidurghaṭakāritvalakṣaṇaiśvaryavijṛmbhābhāvitādbhutabhāvaḥ prathamakoṭisaṃbhāvanāśūnyakālikākārasvaprakāśāvaraṇanirākaraṇamanorathaśataduṣprāpa ityevaṃprakāraḥ kathamā dyotakanipātasahitena nirūpitaḥ kathaṃcit iti [/] kenacic ca prakāreṇa parameśvarābhinnagurucaraṇasamārādhanena parameśvaraghaṭitenaiva / (「そして今問題になっているそれ［恩寵］は，二番目の［世俗的ではない］因果関係である．［その恩寵は］世間の肯定的随伴と否定的随伴（anvayavyatireka）を通じて確立されるよく知られている因果関係と異なるから，明瞭な形［の因果関係］として理解されない．［その恩寵は］ある特定の時に起こる［究極的な解脱という］事象の存在に基づいて導出されるべき（unneya）究極的真理である．【'kathamcit' の第一解釈】　［その恩寵は］とても不可能なこと事を生み出すことを特徴とする＜主宰神性＞の顕れによって不可思議性（adbhutabhāva）がもたらされたものである．［その恩寵は］自らを照らし出すことに対する覆うものを取り除こうという幾百の願望によっても獲得しがたい．［その覆うものは］［これが］始点ではないかと考えられない［始まりのない］暗雲をもたらす．このような種類の［恩寵］が，［第一カーリカー中の］'katham'［という不変化詞］によって，標示者である不変化詞(dyotakanipāta)［である 'cid' という語］を伴って 'kathaṃcit' と示された．【'kathamcit' の第二解釈】　そして，ある何らかの方法で，最高主宰神と異ならない師への帰依（文字通りには、足下へひれ伏すこと）によってである．［その帰依は］最高主宰神によって生み出されたものに他ならない」) ĪPV のページ番号は Pandey の刊本に従う。

［最高主宰神の属性への］近接をもたらすこと（upakāra）[4]を望むために、その根拠があらゆるものの実現の獲得である（samastasaṃpatsamavāptihetu）その［大主宰神の］再認識を私は可能にする」

アビナヴァグプタの詳細な注釈の一例として 'samasta-saṃpat-samavāpti-hetu' という複合語の解釈が挙げられる。アビナヴァグプタは、この複合語を「あらゆる至福の獲得の根拠」と「その根拠があらゆるものの実現の獲得であるもの」というように二通りに解釈する。そして「あらゆる至福の獲得の根拠」という意味で[5]、「隷属」（dāsya）と「近接性をもたらすこと」（upakāra）にかかる修飾語として、「その根拠があらゆるものの実現の獲得であるもの」という意味で[6]、「その再認識」（tatpratyabhijñā）にかかる修飾語として解釈する[7]。またアビナヴァグプタは一般に「扶助」を意味する 'upakāra' という語を語源的に「近接性をもたらすこと」と解釈している。アビナヴァグプタは、このように複合語の分析や語源的解釈を駆使し、さらには一つの語を二度読みするなどの修辞的技法を用いて、ウトパラデーヴァによって明示されなかった再認識派の様々な重要な概念を*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*において敷衍している。

アビナヴァグプタ以後、*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*が再認識派の代表的な論書となったが、それはこの論書が、派生的な議論にまで踏み込まず、再認識派の神学体系の精髄を明らかにすることに専念しているからである。*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*が再認識派の中で代表的な論書となったことは、*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*以外の再認識派の論書に対する注釈がほとんど著されておらず、さらに*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*の写本の数が他の再認識派の論書の写本の数に比べて圧倒的に多いという事実からも知ることができる。

*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*に対する注釈として現在知られているものは次の二つである。

- *Bhāskarī*
- *Īśvarapratyabhijñāvimarśinīvyākhyā*

---

[4]人々を助けることとは、この場合、最高主宰神の属性への近接性をもたらすことを助ける、ということである。ひとは最高主宰神の属性を獲得するとき、自らが最高主宰神となるのである。See ĪPV I p. 33, 3–4: upaśabdaḥ samīpārthaḥ, tena janasya parameśvaradharmasamīpatākaraṇam atra phalam /（「［'upakāra' の］'upa' は、近接を意味している。したがって、ここでは、人々に最高主宰神の属性（dharma）への近接性をもたらすこと（samīpakaraṇa）が結果である」）

[5]この場合、当該の複合語は Gen. Tp. として解釈される。See ĪPV I p. 33, 5–6: parameśvaratālābhe hi samastāḥ saṃpadaḥ tanniḥṣyandamayyaḥ saṃpannā eva, rohaṇalābhe ratnasaṃpada iva /（「なぜなら、ちょうどローハナ山を獲得すれば宝石という至福［が獲得される］ように、最高主宰神の属性を獲得すれば、その［最高主宰神の属性の］流出からなるあらゆる［<遍満性>などの］至福がまさに獲得されるからである」）

[6]この場合、当該の複合語は Loc. Bv. で解釈される。See ĪPV I p. 34, 5–35, 1: samastasya bhāvābhāvarūpasya bāhyābhyantarasya nīlasukhādeḥ yā saṃpat saṃpattiḥ siddhiḥ tathātvaprakāśaḥ, tasyāḥ samyak avāptiḥ vimarśarūḍhiḥ, saiva hetuḥ yasyāṃ tatpratyabhijñāyām, tathā hi—sphuṭatarabhāsamānanīlasukhādipramānveṣaṇadvāreṇaiva pāramārthikapramātṛlābha iha upadiśyate /「［'samasta-saṃpat-samavāpti-hetu' は、Loc.Bv. で］その［最高主宰神の再認識］に対する根拠があらゆるものの実現の獲得に他ならないその最高主宰神の再認識［という意味である］。'samasta'「あらゆるもの」とは、存在と非存在を本質とする外的な青や内的な楽等である。'sampat'「実現」とは、実現（saṃpatti=siddhi）であり、そのような［青や楽等］としての光照である。'samavāpti'「獲得」とは、完全に獲得することであり、反省的意識に昇ることである。すなわち、この［体系］において、より明瞭に現出している青や楽等の認識を［根源は何かと］まさに探求することを通じて、究極の認識主体が獲得されることが教示される」

[7]アビナヴァグプタが示す帰敬偈の構文解釈は次の通りである。See ĪPV I p. 39, 1–4: maheśvarasya dāsyaṃ samastasaṃpallābhahetuṃ kathaṃcit āsādya, janasyāpi kathaṃcit tatpratyabhijñām āsādya prāpayya, upakāraṃ samastasaṃpallābhahetubhūtaṃ maheśvaradāsyātmakam icchan, tām eva samastasaṃpatsamavāptihetukāṃ tatpratyabhijñām upapādayāmi /（「あらゆる至福の獲得の根拠である大主宰神への隷属を何らかの方法で［完全に］獲得して、人々にも何らかの方法でそれを再認識せしめる手段を［完全に］獲得せしめて（āsādya=prāpayya）、あらゆる至福の獲得の根拠であり、大主宰神への隷属に他ならない［最高主宰神の属性（dharma）への］近接性をもたらすことを望むために、まさにその根拠があらゆるものの実現の獲得であるその［大主宰神の］再認識を私は可能にする」）

このうち、バースカラカンタ (Bhāskarakaṇṭha, 18 世紀) の *Bhāskarī*は*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*の一言一句をもらさず注釈しようとし、派生的な議論にはあまり深入りしないところに特徴がある。またヴィシュヌ教の文献であるヴァーマナダッタ (Vāmanadatta: ca. 900–950) 著 *Saṃvitprakāśa* にしばしば言及するなど、再認識派の神学体系の普遍性を確立しようとする姿勢が伺える。一方作者不詳であるが南インドの作者によるものと考えられる*Īśvarapratyabhijñāvimarśinīvyākhyā* は *Bhāskarī*に比べて簡潔な注釈である。この注釈は、Sanderson[2007] においてアビナヴァグプタの真作ではないと指摘されている *Paryantapañcāśikā* や *Parātrīśikālaghuvṛtti* からの引用を含んでいる。

*Bhāskarī*の刊本は、Pandey がバースカラカンタの子孫から譲り受けた一種類の写本にのみ依拠している。そのため、Pandey によって訂正が加えられている場合や写本の欠落箇所については*Īśvarapratyabhijñāvimarśinīvyākhyā* から補われている場合もあり、複数の写本に基づく再校訂テキストの作成は必要不可欠である。しかしながら、*Bhāskarī*は現状では唯一利用することのできる注釈である。*Bhāskarī*の写本については、写本カタログによれば、シュリーナガルの図書館に現存することが報告されている[8]。

Īśvarapratyabhijñāvimarśinīvyākhyā は Rastogi によって刊本が準備されつつあるが[9]、写本のトランスクリプト一本だけを利用している点に問題を指摘することができる。*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī-vyākhyā* の写本については、トリヴァンドラムにマラヤラム写本が一本[10]、そしてマドラスにトランスクリプトが二本現存する[11]。マラヤラム写本は、図書館の助手 P. L. Shaji 氏によれば少なくとも 200 年以上前に書写されたものである。この二つのトランスクリプトについては、一方のトランスクリプトのマージンに付された数字が他方のトランスクリプトのページ番号に対応していることから、前者は後者を複製したものと考えられる[12]。

この他には、バッターラカ・スンダラ (Bhaṭṭāraka Sundara) 著*Īśvarapratyabhijñākaumudī*[13]、ナーガーナンダ(Nāgānanda)の著作[14]、さらにはサダーナンダ(Sadānanda)著*Īśvarapratyabhijñānvayadīpikā* がある[15]。しかしながら、これらは出版されておらず、それぞれの内容および著者の年代などについても詳細は不明であり、校訂テキストの出版が待望されるところである[16]。

3. *Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*の刊本について

これまでに出版されている*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*の刊本は次の二つである。

---

[8]No. 2412, Oriental Research Library, Srinagar, śāradā, 11 folios. No. 847, Oriental Research Library, Srinagar, śāradā 155 folios. 分量から前者は部分的なものと思われる。他にも*Īśvarapratyabhijñāvimarśinīṭīkā* というタイトルの写本も確認されるが (No. 1655, 1625, 1146)、筆者未見である。

[9]かつて Pandey と Rastogi の共同研究という形で刊本が準備されていたが、共同著作権の問題によって共著という形で今後出版される見込みはない。

[10]No. 131, Oriental Research Institute and Manuscripts Library, Trivandrum

[11]No. 2103, R4353, Government Oriental Manuscript Library, Madras.

[12]筆者は*Īśvarapratyabhijñāvimarśinīvyākhyā* のマラヤラム写本およびトランスクリプトについてはすでに入手済みであるが、*Bhāskarī*の写本については未見である

[13]No. 838, Oriental Research Library, Srinagar, śāradā, 142 folios. No. 1089, Oriental Research Library, Srinagar, śāradā, 82 folios. バッターラカ・スンダラは、Torella[2002: XLIV, LIII] によれば、*Īśvarapratyabhijñākārikāvṛtti* の写本のコロフォンに再認識の論書に注釈を著したものとして言及されている。

[14]No.28, B. 24, Adyar Library. この写本の存在は Raghavan[1981: 31] に言及されている。

[15]B167, Oriental Research Institute, Mysore, Telugu, 133 folios.

[16]これらの写本については、*Īśvarapratyabhijñānvayadīpikā* をのぞいて未入手である。

1. *Īśvarapratyabhijñāvimarśinī* of Abhinavagupta, edited by Mukunda Rām Shāstri, 2vols. Kashmir Series of Texts and Studies 22, 33. Bombay: Nirṇaya Sagar Press. 1918, 1921. Reprinted Delhi: Butala and Company, 1984.
2. *A Commentary on the Īśvarapratyabhijñāvimarśinī of Abhinavagupta*. 2vols. Edited by K. A. S. Iyer and K. C. Pandey. Allahabad: The Princess of Wales Sarasvati Bhavana. 1938, 1950. Reprinted, Delhi: Motilal Banarsidass, 1986.

Kashmir Series of Texts and Studies (KSTS) の一冊として出版された前者は、四種類の写本に基づいて校訂されており、写本のマージンから回収されたと思われる脚注が付されている。一方、Pandey によって校訂された後者には、バースカラカンタ（Bhāskarakaṇṭha, 18 世紀）の注釈 *Bhāskarī*が含まれている。

これら二つの刊本の間には多くの異読があるが、根本的に異なる読みを提示している箇所は少ない。Pandey の刊本に提示されているテキストは、基本的にバースカラカンタが注釈したであろう*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*のテキストに従っている。しかしながら、Pandey の刊本では、新たな写本は使用されていない。したがって、KSTS が基づいていた四本の写本によって支持されず Pandey の刊本にのみ見られる異読については、これら以外の写本にその根拠が求められなければならない。また Pandey の刊本において KSTS の刊本およびその脚注に見られない読みが提示される場合があるということは、KSTS の刊本が基づいている四本の写本の伝承とは別の系統の伝承が存在する可能性を示唆する。これらのことから、オリジナルのテキストを提示するためには KSTS の刊本が基づいていない写本も含め複数の写本を参照し再校訂テキストが作成されなければならない。

これら二つの刊本が、根本的に異なる読みを提示している一例を以下に挙げる。

> ĪPV[KSTS=110, 5–7, Pandey=142, 6–143, 1]: na ca tat iyatāpāramārthikam[17], nirmīyamāṇasya sarvasya ayam eva paramārthaḥ yataḥ /[18]
>
> 「しかしその［区別（vicchedana)］は、［ただ顕現しているにすぎない、という］これだけのことによって究極的なものではないということはない。現に創造されている一切のこの［顕現］は究極的実在であるから」

ここでは顕現したものが究極的実在であるか否かが問題である。バースカラカンタは、顕現しているだけでは究極的実在ではないという根拠として眼病者に顕われた二つの月を例に挙げている[19]。しかしアビナヴァグプタ自身が述べているように、再認識派の体系では、主宰神シヴァによって創造されたものの顕現は究極的実在である。したがって、現象世界における個別的な認識の区別あるいは認識対象と認識との区別も、それが顕現している限りでは究極的実在である。この場合、Pandey の刊本の 'pāramārthikam' よりも KSTS の刊本の 'apāramārthikam' のほうがより適切であ

[17]apāramārthikam A, pāramārthikam I. A は KSTS の刊本、I は Pandey の刊本を示す。

[18]paramārthaḥ yataḥ / A, paramārthaḥ / yataḥ I.

[19]See Bh I, p.142, 22–143, 8: tat vicchedanam, iyatā avabhāsamātreṇa, pāramārthikam satyabhūtam, anyathā candradvitvasyāpi pāramārthikatāpatter iti bhāvaḥ / (「『それ』すなわち区別。『これだけのことによって』すなわちただ顕現していることによって。『究極的なもの』すなわち真実であるもの。さもなければ、二月さえも究極的実在であることになってしまうから、という意である」)

る。写本上では 'iyatā' と 'apāramārthikam' がサンディを起こし 'iyatāpāramārthikam' という形であらわれることが、このような異読を生んだ原因と考えられる。

3. *Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*の写本について

再校訂テキストが基づいている写本と略号は以下の通りである。以下のリストには現在入手中の写本も含まれている。上記刊本のうち、KSTS の読みを A、Pandey 版の読みを I とする。KSTS の刊本は、校訂者の Mukunda Rām Shāstri によれば、4 本のシャーラダー写本に基づいている。これらの写本は、シュリーナガルの図書館に少なくとも 11 本現存する*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*のシャーラダー写本に含まれる可能性があるが[20]、現状ではこれらの写本を入手することは困難であるためこの再校訂テキストには使用していない。この再校訂テキストでは、KSTS の刊本が基づいている写本の異読を刊本の脚注情報にしたがって K、Kh、G、Gh としているが、これらの写本の異読については KSTS の脚注に付された情報に限定される。

- Ṅ: Central Library, Maharaja Sayajirao University of Baroda, Baroda, No. 1828, paper, śāradā script. (未入手)
- C: Ganganatha Jha Kendriya Sanskrit Vidyapeetha, Allahabad, No. 1212, paper, śāradā, complete.
- Ch: Staatsbibliothek zu Berlin, Berlin, No. 5408, paper or birchbark, śāradā, complete.
- J: Akhila Bhāratīya Saṃskṛt Pariṣad, Lucknow, No. 3366, paper, śāradā, complete.
- Jh: Tagore Library, University of Lucknow, Lucknow, uncatalogued, paper, śāradā, complete.
- Ñ: Indira Ghandhi National Centre for the Arts, Delhi, uncatalogued, birchbark, śāradā, incomplete.

  Beginning: vasya tathātvam anucitam...(ĪPV1.1.1).

  End....vyavasthāpyete yato hy a (ĪPV2.3.1).
- Ṭ: Sri Ranbir Research Institute, Raghunath Mandir, Jammu, No. 2. birchbark, śāradā, incomplete.

  Beginning: ratra saṃcikramayiṣuḥ ... (ĪPV1.1.1).

  End: ...śrīmadācāryābhinavaguptasyeti śivam (最後まで含む).
- Ṭh: Sri Ranbir Research Institute, Raghunath Mandir, Jammu, No. 19, birchbark, śāradā, incomplete.

  Beginning: śrīgurave śivāyoṃ namaḥ | śrīgaṇanāthāya namaḥ | namaḥ sarasvatyai | oṃ nirāśaṃsāt pūrṇād aham ....

  End: ... asyārthasya svapratyaya (ĪPV4.16).

[20]No. 2403, 2250, 787, 1035, 1037-2, 995, 2331, 1161, 1477, 816, 1260-3, Oriental research Library, Srinagar

- Ḍ: Bhandarkar Oriental Research Institute, Pune, 466/197576, birchbark, śāradā, incomplete.

  Beginning: sanāt | vaidharmyasādharmyābhyām...(ĪPV1.4.4).

  End: ... vāṅmanaḥ kāyapravṛttiḥ sā de (ĪPV 2.3.9).
- Ḍh: Bhandarkar Oriental Research Institute, Pune, 168/188384, paper, śāradā, complete.
- Ṇ: School of Oriental and African Studies Library, London, No. 207 in R. C Dogra's 1978 catalogue (= MS 44255), paper, śāradā. (未入手)

これらの写本の相互関係についてはいまだ不明確であり現在までの写本処理の過程でいえることは多くはない。しかし、*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*の帰敬偈中の 'nirābhāsāt' と 'nirāśaṃsāt' という異読から、これらの写本は二つのグループに分けられる可能性がある。そしてこれら二つのグループがバースカラカンタの時代にはすでに存在していたということは確かである。

バースカラカンタは帰敬偈の異読について次のように言及している。

> Bh I p.6: atra ca nirābhāsād ity asya sthāne nirāśaṃsād iti tu praśastaḥ pāṭhaḥ / śrītantrālokaṭīkāyāṃ śrījayarathena parigṛhītatvāt / tatra ca nirāśaṃsāt pūrṇatvenākaṅkṣārahitād iti yojanīyam /
>
> 「そしてこの[帰敬偈]には、'nirābhāsāt' というこの[語の]代わりに、一方で 'nirāśaṃsāt' というすぐれた異読がある。聖 *Tantrāloka* の注釈で聖ジャヤラタによって是認されていることから[21]。そしてその場合 'nirāśaṃsāt' すなわち遍満しているものであるがゆえに期待を欠く[それ自身]、と構文解釈されるべきである」

バースカラカンタはこの異読について補足的に言及していることから、おそらくバースカラカンタが見ていたテキストの読みは 'nirābhāsāt' であったと思われる。しかしジャヤラタ(Jayaratha: 13世紀)の注釈を援用する形で、'nirāśaṃsāt' という読みのほうがよりすぐれたものであることを述べているのである。

[21] See TĀV on TĀ9.51: amunaiva cāśayenānyatra nirāśaṃsāt pūrṇād aham iti purā bhāsayati yat dviśākhām āśāste tad au ca vibhaṅktuṃ nijakalām / svarūpād unmeṣaprasaraṇanimeṣasthitijuṣas tadadvaitaṃ vande paramaśivaśaktyātma nikhilam // ityādyenoktam //

ओं नमः संविद्वपुषे शिवाय।

अथ

ईश्वरप्रत्यभिज्ञाविमर्शिनी।[1]

निराशंसात्[2] पूर्णादहमिति पुरा भासयति
　यद् द्विशाखामाशास्ते तदनु च विभङ्क्तुं[3] निजकलाम्[4]।
स्वरूपादुन्मेषप्रसरणनिमेषस्थितिजुषस्
　तदद्वैतं वन्दे परमशिवशक्त्यात्म निखिलम्॥ १॥
श्रीत्रैयम्बकसद्वंशमध्यमुक्तामयस्थितेः।
श्रीसोमानन्दनाथस्य विज्ञानप्रतिबिम्बकम्॥ २॥
अनुत्तरानन्यसाक्षिपुमर्थोपायमभ्यधात्।
ईश्वरप्रत्यभिज्ञाख्यं[5] यः शास्त्रं[6] यत् सुनिर्मलम्॥ ३॥
तत्प्रशिष्यः करोम्येतां तत्सूत्रविवृतिं लघुम्।
बुद्धाभिनवगुप्तोऽहं श्रीमल्लक्ष्मणगुप्ततः॥ ४॥
वृत्त्या तात्पर्यं टीकया तद्विचारः
　सूत्रेष्वेतेषु ग्रन्थकारेण दृब्धम्[7]।
तस्मात् सूत्रार्थं मन्दबुद्धीन्[8] प्रतीत्थं
　सम्यग् व्याख्यास्ये[9] प्रत्यभिज्ञाविविक्त्यै॥ ५॥
सर्वत्राल्पमतौ यद्वा कुत्रापि सुमहाधियि।
न वान्यत्रापि तु स्वात्मन्येषा स्यादुपकारिणी॥ ६॥

---

[1]On the beginning sentences of the MSS, see diplomatic editions.
[2]nirāśaṃsāt A C J Ḍh] nirābhāsāt I G Ch Jh Ṭh.
[3]vibhaṅktum A I C J Jh Ṭh Ḍh] vibhaktum Gh Ch.
[4]nijakalam Jh.
[5]īśvarapratibhijñā Ṭh.
[6]yaḥ śāstraṃ omitted in C.
[7]dṛbdham A I C Ch J Jh Ḍh] dṛṣṭam Ṭh.
[8]mandabuddhīn A I C Ch J Jh Ḍh] sūkṣmabuddhīn Ṭh.
[9]vyākhyāse Jh.

0. 帰敬偈

「私は一切なるそれを讃える。[それは] <最高のシヴァ>と< [最高の] シャクティ>を本質としており (paramaśivaśaktyātma)、不二なるものある。[その不二なるものは] まずはじめに『私』というように [シャクティの部分を] 現出せしめる。そしてそのあとで、[それ] 自身から [シヴァとシャクティという] 二つの枝に自身の部分を分化しようと意欲する。[それ自身は] 遍満しているものであるがゆえに期待を欠いており (nirāśaṃsāt)、[シャクティの] 開眼 (unmeṣa) によって展開を、[シャクティの] 閉眼 (nimeṣa) によって存立を享受する」(第1偈)

「聖ラクシュマナグプタから学んで、彼 [聖ウトパラデーヴァ] の弟子の弟子である私アビナヴァグプタは、このスートラの簡潔な注釈を著す。彼 [ウトパラデーヴァ] は、『主宰神の再認識』(*Īśvarapratyabhijñā*) と呼ばれる論書を著した。[その論書は、] 聖トリアムバカ (Tryambaka) [22] というすばらしい血筋の中で真珠に他ならないものとして存立する聖ソーマーナンダの知識を映すものであり、[最高シヴァ以外の] 他者を直証者としない [解脱と呼ばれる] 人間の最高目的の [達成] 手段であり、すばらしく無垢なるものである」(第2–4偈)

「[このゆえに、] このスートラに対して、著者 [聖ウトパラデーヴァ] は、注 (vṛtti) を通じて趣旨 (tātparya) を紡ぎ、詳しい注釈 (ṭīkā) を通じてその [趣旨の] 考察 (vicāra) を語った。それゆえ、私はスートラの意味を以下のように [明らかにして]、再認識の吟味のために愚かな者たちに向かって説明するだろう」(第5偈)

「すべての愚か者たちに対して、あるいは幾人かの賢いひとたちに対して[この*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*が扶助を与えるものでありますように]。あるいは他のものたちに [扶助を与え] ないとしても、自分自身に対しては、この [*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*] が扶助を与えるものでありますように」(第6偈)

研究ノート

第1偈

1.1 第1偈において注目されるべき異読は、a句にある 'nirāśaṃsāt' (「期待を欠くもの」) と 'nirābhāsāt' (「顕現を欠くもの」) である。この異読についてはすでに引用したバースカラカン

[22]伝説によれば、トリアムバカは一元論的シヴァ教の創始者とされる人物であり、賢者ドゥルヴァーサス (Durvāsas) の息子である。ドゥルヴァーサスは、忘れられた状態にある秘密の教えを復活させるようにシヴァ自身から教示を授けられた。そして、彼はシヴァ教のアーガマを三人の息子に分けた。すなわち、一元論、二元論、一元論かつ二元論をそれぞれトリアムバカ、アマルダカ (Amardaka)、シュリーナータ (Śrīnātha) に分けた。ここに三つのシヴァ教の伝統が生まれた。この三つの伝統に関して、アビナヴァグプタは、*Tantrāloka* において、次のように述べている。TĀ36.12: tryambakāmardakābhikhyaśrīnāthā advaye dvaye / dvayādvaye ca nipuṇāḥ krameṇa śivaśāsane // (「トリアムバカ、アマルダカ、シュリーナータは、順次、一元論 [のシヴァの教示に]、二元論 [のシヴァの教示に]、一元論かつ二元論のシヴァの教示に精通している」) See Pandey[1963: 135–137] and Torella[2002: XIV].

タの言明から明らかなように、バースカラカンタの時代にすでにあった異読である。そしてバースカラカンタ自身は 'nirāśaṃsāt' という読みをすぐれたものとみなしている。'nirābhāsāt' という読みを採用した場合、「[それ自身は] 顕現を欠いており (nirābhāsāt)、遍満しているものであり、[シヴァの] 開眼によって展開を、[シヴァの] 閉眼によって存立を享受する」というように解釈される[23]。この「顕現を欠いているもの」という読みを採用すれば、主宰神シヴァの「世界を本質とするもの」(viśvātmaka) という側面と「世界を超越したもの」(viśvottīrṇa) という側面のうち、「顕現を欠いているもの」という語によって後者の側面、'pūrṇāt' (「遍満したもの) という語によって前者の側面が強調される。一方、「期待を欠くもの」を採用すれば、主宰神の自主性 (svātantrya) の側面が強調される。

また b 句に、'vibhaṅktuṃ' と 'vibhaktum' という異読もある。'vibhaṅktuṃ' は第七種動詞 bhañj に接頭辞 vi が付加された動詞の不定形であり、「バラバラに壊れる」「二つに割れる」などを意味する。一方、'vibhaktum' は第一種動詞 bhaj に接頭辞 vi が付加された動詞の不定形であり、「分割する」「区別する」などを意味する。これら二つの語は、それ自身を分化するということを意味しうる点で、ここでは二つの語に本質的な違いはない。

1.2　d 句にある 'paramaśivaśaktyātma' という複合語について、バースカラカンタは二通りの解釈をしている。第一解釈によれば、「<最高のシヴァ>と<最高のシャクティ>を本質とするもの」を意味し、究極的原理にある二つの本質としてのシヴァとシャクティが強調されている[24]。第二解釈によれば、「最高のものであり、かつ<シヴァ>と<シャクティ>を本質とするもの」を意味し、シヴァ教における 36 番目の原理としての<シヴァ>原理を超越した 37 番目の原理が意図されている[25]。

1.3　バースカラカンタは、クラ派の性交儀礼、特に<最初の儀式> (ādiyāga) [26]を讃える解釈も提示している。それによれば、この偈は次のように解釈される。

「私はその一体化 (advaita) を讃える。[その一体化 (advaita)] は、シヴァ [すなわ

[23]Bh I p.4, 22–24: nirābhāsāt śivaśaktyādirūpebhyaḥ ābhāsebhyo niṣkrāntāt, ekatvena śivaśaktyādivikalparahitād iti yāvat / tac ca ṣaṭtriṃśe śivatattve 'py astīty ata uktaṃ pūrṇāt iti / (「'nirābhāsāt'「顕現を欠いている [それ自身] すなわちシヴァやシャクティなどといった顕現から離れたもの。要するに単一なるものとしてシヴァやシャクティなどの概念的構想を欠いているもの。しかしそれは 36 番目のシヴァ原理にも存在する、というこのことから 'pūrṇāt' と述べる。」)

[24]See Bh I p.34: paramaśivaḥ śuddhaprakāśarūpaḥ / ...yady api svāntaḥkṛtaśaktikasyaiva paramatvaṃ tathāpi tanniṣkṛṣṭasya yogyatayā taj jñeyam / te eva, arthāt samarasībhūya, ātmā svarūpaṃ yasya tādṛśam / yady api sadaiva tayor aikyam na tu kenāpi nimittena kadāid eva tathāpi śiṣyabodhanārtham ekatra tattve dvitvam āropyaivam uktam / (「'paramaśiva' (最高シヴァ) すなわち清浄なる光照を本質とするもの。(略) たとえ自身に内在化されているシャクティを有する [シヴァ] こそが最高であるとしても、その [最高シヴァ] から抽出された [シャクティ] は、能力 (yogyatā) としてその [最高である] ことが知られるべきである。[それは] それら [<最高のシヴァ>と<最高のシャクティ>だけを本質とするものである。意味の上から同一化して (samarasībhūya) [本質を構成する]。たとえそれら両者の同一性は、ある特定の原因によってまさに特定の時にあるのではなく、まさに常にあるとしても、弟子たちの理解のために単一の原理に二者性を付託して以上のように述べられている」

[25]See Bh I p.4: atha vā paramañ ca tat śivāditattvaṣaṭtriṃśakād uttamañ ca tat śivaśaktyātma ceti vigrahaḥ (「あるいは ['paramaśivaśaktyātma' を 'parama' と 'śivaśakti' の同格限定複合語と解釈して] 最高のものであり、かつ<シヴァ>をはじめとする 36 原理を超えたもの、すなわち<シヴァ>と<シャクティ>を本質とするもの、と分析される」)

[26]<最初の儀式>は、クラ (Kula) を崇拝する一派の性交儀礼であり、成就したもの (siddha) とヨーギニー (yoginī) の性交を指す。クラは、第三十六番目の<シヴァ>原理をも超える最高原理を指す。この場合、第三十六番目の原理である<シヴァ>原理はアクラ (Akula) とも言われる。そしてクラはさらに、ヨーギニーの家系あるいは一族、また身体をも意味する。クラを崇拝するものたちにとって、超自然的な力はクラ崇拝特にクラとの同一化を通じて得られる。

ち父］とシャクティ［すなわち母］に基づいて［一体化］自体が生じるものであり、すべて［の身体の部分］に行き渡るもの（nikhila）である。その［一体化の］本質は、［対象の］顕現を欠いており、満足したものであり、目を開け［て外を見］ることによって［言葉にならない感情に］移行することと［射精して］目を閉じることによって［歓喜にみちた自己に］休らうことを享受するものである。［一体化は］その［一体化の］本質に基づいて、私［アビナヴァグプタという身体］を顕現せしめた。そしてそのあとで、［妻との一体化によって、両親という］二つの枝を持つものになる自分の［息子という］部分を生み出そうと意欲した」[27]

このような解釈は、バースカラカンタ独自のものではなく、すでに *Tantrāloka* の帰敬偈に対するジャヤラタの注釈にみることができる[28]。

---

[27]See Bh I p. 7, 14–19: atra cāhamabhinavākhyaḥ putraḥ / paramaśivaḥ narasiṃhaguptākhyaḥ pitā / śakti vimalākhyā mātā / mātāpitroḥ pratyakṣaṃ śivaśaktirūpatvāt / tābhyām upādānabhūtābhyām ātmā svarūpaprādurbhāvaḥ yasya tādṛśam, nikhilam sarvāṅgavyāpi / advaitam advaitarūpaṃ saṃyogam / viśeṣaṇaviśiṣṭākṣepe ādiyāgādhirūḍhaṃ tayor mithunamiti yāvat / granthakārasya mātāpitarau etannāmakāvāstāmiti hi prasiddhiḥ [/] tantrāloke ca prathamaśloke svayaṃ tenāpyuktatvāt /（またこの［マンガラ］では、私はアビナヴァグプタと呼ばれる息子である。'paramaśiva'「最高シヴァ」すなわちナラシンハグプタと呼ばれる父。'śakti'「シャクティ」すなわちヴィマラーと呼ばれる母。父と母は、文字通りには（pratyakṣam）、シヴァ（男性性器）とシャクティ（女性性器）を本質とするから。['paramaśivaśaktyātman' は gen.Bv. で］それら原因である二者から自体が生じるもの、そのように表現される［一体化］。'ātmā'「自体」すなわち［それ］自身の生起。'nikhila'「すべてに行渡る［一体化］」すなわち、あらゆる身体部分を遍充する［一体化］。'advaita'「一体化」すなわち、不二を本質とする結合（saṃyoga）。要するに、['paramaśivaśaktyātma', や 'nikhila' という］限定要素によって ['advaita' という］被限定要素が含意されるとき、＜最初の儀式＞（ādiyāga）に位置する、それら［シヴァとシャクティ／父と母］の性的結合（mithuna）である。著者の父と母は、以上のような名前を持つものであったと、実によく知られている。また、*Tantrāloka* の第一シュローカにおいて、彼［アビナヴァグプタ］自らによっても、述べられていることから」）

See Bh I p. 7, 19–24: vande / tat kim / yat nirābhāsāt tasminsamaye vedyagalanena samastaviṣayābhāsarahitāt / ata eva pūrṇāt tṛptiṃ gatāt / anyākāṃkṣārahita eva hi tṛpta ucyate / tathā unmeṣaṇa bahiravalokanena, prasaraṇam anākhyeṣu bhāveṣu saṃcāraḥ, nimeṣeṇa visargakāle svātmany avasthānena, sthitiḥ ānandabharite svasvarūpe viśrāmaḥ, te juṣata iti tādṛśāt, svarūpāt advaitākhyāt svasmādrūpāt /（私は讃える。それはどのようなものか。'nirābhāsāt'「顕現を欠いている［本質］」すなわち、そのとき、認識対象の消滅によって、あらゆる対象の顕現を欠いている。まさにこのことから、'pūrṇāt'「満足した［本質］」すなわち、満足したもの。なぜなら、他への期待を欠いているものこそが満足したものと言われるからである。さらに、'unmeṣeṇa'「目を開けることによって」すなわち、外界を見ること（bahiravaloka）によって。'prasaraṇa'「移行すること」すなわち、言葉で表現できない（anākhya）感情に移行すること。'nimeṣeṇa'「目を閉じることによって」すなわち射精の時には、自身の内に、定在することによって。'sthiti'「休らうこと」すなわち歓喜によって満たされた自己の本質に休らうこと。['unmeṣaprasaraṇanimeṣasthitijuṣ' は、Up.Tp. で、］それら［目を開けることによって移行することと目を閉じることによって休らうこと］を享受するもの、そのように表現される［自身］。'svarūpāt'「［それ］自身に基づいて」すなわち、一体化と呼ばれる自己の本質に基づいて」）

See Bh I p. 7, 24–8, 7: aham iti parimitavācakāhaṃpadaviṣayam abhinaveti nāmakaṃ deham / purā bhāsayati bhāsayati sma / kuṇḍagolakākhyadravyaniṣyandakrameṇa prakaṭayati sma / tadanu ca dviśākhām vadhvā saha melanena dviśākhībhūtām, nijakalām sutarūpaṃ svāṃśam / vibhaṅktum putrapautrādibhāvena vibhāgayuktāṃ, sampādayituma, āśāste, vartamānasamīpye vartamānam /（「'aham iti'「『私』というように」すなわち、限定されたものを表示する『私』という語の対象であるアビナヴァグプタと呼ばれる身体。'purā bhāsayati'「まず始めに顕現せしめた」すなわち、顕現せしめた。うすがゆ（kuṇḍagolaka）と呼ばれる実体があらわれる仕方で現出せしめた。そして、そのあとで（tad anu ca）、'dviśākhām'「二つの枝を持つ［自身の部分］」すなわち、妻との結合によって、二つの枝を持つものになる［自身の部分］。'nijakalām'「自身の部分を」すなわち、息子という自己の部分を。'vibhaṅktum'「分けようと」すなわち、息子と孫などへの分化と結びついた［自身の部分］を生み出そうと。'āśaste'「意欲した」すなわち、現在との近接性の意味で用いられている現在形である。）

[28]See Bh I p. 8, 13–17: ayam cārtho 'tirahasyatvena vaktum ayogyo 'pi vimalakalāśrayābhinavasṛṣṭimahājananī bharitatanuś ca pañcamukhaguptarucir janakaḥ / tadubhayayāmalasphuritabhāvavisargamayaṃ hṛdayam anuttarāmṛtakulaṃ mama ftāt // iti śrītantrālokādyaśloke svataṃ granthakṛtā sthāpitaḥ, śrījayarathena [em. śrījayadrathena] ca sphuṭaṃ vyāṅhyāta ity asmābhir apīha sūcanāmātreṇa prakaṭīkṛtaḥ, iti na vayam eva kevalaṃ paryanuyogārhāḥ iti /（「またこのことは秘儀であることによって述べるにふさわしくないけれども、『私の＜心＞が輝きますように。［その私の＜心＞は］その両方［シヴァとシャクティ］の結合によって顕現した存在の放出を本質とするものであり、無上の不死の身体を有するものである。［その両者は］父と母である。その母は、汚れなき能力を拠り所とし、新しい創造において輝きを有するものである。その父は満たされた本質を有するものであり、［精神性（cit）、歓喜（ānanda）、意欲（icchā）、認識（jñāna）、行為（kriyā）の］五

第2–4偈

2.1　ここでは特に注記されるべき異読はない。これら三つの偈においてアビナヴァグプタは、師資相承の伝統すなわち、ソーマーナンダ、ウトパラデーヴァ、ラクシュマナグプタ、アビナヴァグプタという再認識派の学匠の系譜を述べている。またウトパラデーヴァが著した*Īśvarapratyabhijñākārikā*がソーマーナンダが著した*Śivadṛṣṭi*を反映したものであることを語っている。

2.2　Pandeyの英訳にはd句の 'sunirmalam'（「すばらしく無垢なるもの」）の訳が見られない[29]。バースカラカンタは、'sunirmala' が 'anuttarānanyasākṣipumarthopāya'（「他者を直証者としない人間の最高目的の手段」）と 'vijñānapratibimbaka'（「知識を映すもの」）とともに 'īśvarapratyabhijñākhyam śāstram'（「『主宰神の再認識』と呼ばれる論書」）を修飾するものとして解釈しており、それにしたがった[30]。

第5偈

3.1　この偈によれば、ウトパラデーヴァが*Īśvarapratyabhijñākārikā*を著した後に、それぞれ独立した著作として二つの注釈*Īśvarapratyabhijñākārikāvṛtti*と*Īśvarapratyabhijñāvivṛtti*を著したかのように思われる。しかしながら、少なくともアビナヴァグプタによれば、*Īśvarapratyabhijñākārikāvṛtti*は、*Īśvarapratyabhijñākārikā*と同時に著されたものであり、両著作はもう一つの注釈*Īśvarapratyabhijñā-vivṛtti*にくらべて密接な関係にある[31]。

バースカラカンタは、再認識派の主要な著作の関係について次のように述べている。

> Bh I p. 2, 16—3, 4: śrīmānutpaladevaḥ svagurunirmitaṃ śivadṛṣṭyākhyaṃ mahārahasyaśāstraṃ vyākhyāya tatpratibimbakalpaṃ kārikāmayam īśvarapratyabhijñākhyaṃ mahāśāstraṃ praṇīya tattātparyasya durbodhatām āśaṃkya tanmātraparā laghupratyabhijñākhyāṃ vṛttiṃ ca kṛtvā tatrāpi mandabuddhyanugrahārthaṃ madhyapratyabhijñākhyāṃ vivṛtiṃ kṛtavān / tatra ca sarvajanahitārthaṃ śrīmatābhinavaguptācāryeṇa bṛhatpratyabhijñākhyā bahuvistarā ṭīkā kṛtā / tadvicāraṇe ca janam aśaktaṃ jñātvā tenaiva pratyabhijñākārikāsūtreṣu saṃgrahamayī vimarśinīti prasiddhā ṭīkā kṛtā /
>
> 「聖ウトパラデーヴァ先生は、自らの師［聖ソーマーナンダ先生］によって著された*Śivadṛṣṭi*と呼ばれる大いなる秘密の論書を説明する。そして、その生き写しである

つの主要なる［シャクティ］によってその望み（ruci）が満たされたものである』（TĀ1.1）というように聖*Tantrāloka*の冒頭のシュローカで著者［アビナヴァグプタ］自ら確立している。また聖ジャヤラタによって［このことは］明瞭に説明されている。したがって、私たちもここで単に示唆するだけで［このことを］明らかにする。したがって、ただ私たちだけが詰問されるべきではない」）ジャヤラタの注釈については Sanderson[2005] を参照せよ。

[29]Pandey[1954: 1]: Having been taught by Lakṣmaṇagupta, I, Abhinavagupta, grand-disciple of him, who wrote the flawless work, called Īśvarapratyabhijñā, am writing this brief commentary on his (Utpala's) work: the work which is a representation of the system of somānanda, a gem in the family of Tryambaka, and is a means to the attainment of the purely subjective supreme human goal.

[30]See Bh I p. 9, 13–14: anyac ca sunirmalam śuddhābhedavācakatvena lakṣaṇayā bhedākhyamalarahitam /（「さらに 'sunirmalam'「すばらしく無垢なるもの」すなわち、清浄な不異を表示するものであるがゆえに、間接的表示によって差異と呼ばれる汚れを欠く［論書］が表示されている」）

[31]See ĪPVV 16: paramārthata aikyam anayor ekakālakṛtatvāt（「究極的には二つ［の著作］は同一である。同時に著されたものであるから」）, 183: evaṃ ca vadan sūtravṛttyor ekagranthatāṃ sphuṭayati /（「そして以上のように述べて、スートラと注が一つの作品であることを明示する」）

(pratibimbakalpa) 詩頌からなる*Īśvarapratyabhijñā* (*Īśvarapratyabhijñākārikā*) と呼ばれる偉大なる論書を著した。そして、その [*Īśvarapratyabhijñākārikā*] の趣旨の難解さを懸念して、その [趣旨の説明] だけを意図して *Laghupratyabhijñā* と呼ばれる注釈 (*Īśvarapratyabhijñākārikāvṛtti*) を著し、その注釈に関しても、愚かなものへの恩寵 (anugraha) のために、*Madhyapratyabhijñā* と呼ばれる注釈 (*Īśvarapratyabhijñāvivṛtti*) を著した。そして、その [*Īśvarapratyabhijñāvivṛtti*] に対して、あらゆる人の利益のために、聖アビナヴァグプタ先生は、*Bṛhatpratyabhijñā* と呼ばれる詳細に渡る注釈 (*Īśvarapratyabhijñāvivṛttivimarśinī*) を著した。そして、人がその [*Īśvarapratyabhijñāvivṛttivimarśinī*] の考察に対して能力がないことを知った後で、同じ彼 [聖アビナヴァグプタ先生] は、*Pratyabhijñākārikāsūtra* (*Īśvarapratyabhijñākārikā*) に対して、要約からなる *Vimarśinī* (*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*) というよく知られている注釈を著した」

ここでバースカラカンタは、アビナヴァグプタの二つの著作順序について、*Īśvarapratyabhijñāvivṛttivimarśinī*が*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*に先行すると述べているが、アビナヴァグプタ自身が後者において前者に言及していることから[32]、*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*が先行すると考えられる。Torella[1994: XLIII] によれば、バースカラカンタは別の箇所 (Bh II, p. 316) で二つの著作順序について上述の箇所とは逆に*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*が先行していると述べているが、Torellaによって言及されている箇所はバースカリーではなく、*Bhāskarī*の欠落を補う形で挿入されている*Īśvarapratyabhijñāvimarśinīvyākhyā* である。南インドのものと思われる注釈*Īśvarapratyabhijñāvimarśinīvyākhyā* は、*Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*が*Īśvarapratyabhijñāvivṛttivimarśinī*に先行していることを伝えている[33]。

3.2 Ṭh写本にのみ 'dṛbdham' (「紡いだ」) に対して 'dṛṣṭam' (「探求した」)、'mandabuddhīn' (「知性が鈍いもの」) に対して 'sūkṣmabuddhīn' (「聡明なもの」) という異読が見られる。前者については「糸」を意味する 'sūtra' との関係からも 'dṛbdham' が適切であろう。後者については、第6偈との関係から 'sūkṣmabuddhi' が適切であろう。

第6偈

4.1 ここでは特に注記されるべき異読はない。先行する偈で述べられた再認識の吟味という目的に対して、二次的な目的として自分自身すなわち自らの息子や自らに帰依する弟子達に扶助を与えることが述べられている[34]。

[32]See ĪPVV III, p.230: anenaiva āśayena asmābhiḥ sūtravimarśinyām ekarasatvena idaṃ sūtraṃ vyākhyātam, iha tu yāvadgati vicārayitum itthaṃ vibhāgena apekṣā vyākhyātā /

[33]当該箇所は、*Īśvarapratyabhijñāvimarśinīvyākhyā* である。See Bh II, p. 316: laghvī ity anena padena punar api svamukhena pratyabhijñāśāstraṃ prati bṛhatī kācid vimarśinī bhavaṣyatīti sūcitam / (「'laghvī' というこの語によって、再び自らの口を通じて再認識の論書に対して *Bṛhatī*という特定の *vimarśinī*があるだろう、ということが示唆されている」)

[34]See Bh I p.16, 26–17, 6: eṣā svātmani svasminn utpattyā bhaktyāveśena ca svātmatulyeṣu putrādiṣu śiṣyeṣu ca, upakāriṇī vinodabodhākhyopakārakāriṇī, syāt / (「この [論書] が 'svātmani' 「自分自身に」すなわち自分自身に対して、誕生を通じて自分に似た息子などに対して、また帰依に参入したすることによって弟子たちに対して。'upakārin' 「扶助を与えるもの」すなわち [理解の困難さを] 取り除く知 (vinodabodha) と呼ばれる扶助するものがありますように」)

ディプロマティックエディション

筆者が写本をどのように読んでいるのかを明らかにし、他者による写本の照合の便宜を図るためにも、それぞれの写本を可能な限り忠実に提示する。単語ごとの区切りについては任意に行っている。

ただしシャーラダー写本に豊富に含まれるマージナルノートの提示については行っていない。

略号表は次の通りである。

*()　フォリオと行数を示す。
?　判読不能箇所を示す。
+　写本欠落箇所を示す。
|　*daṇḍa*
||　double *daṇḍa*
<>　付加された akṣara を含む。
[]　不明瞭な akṣara の部分を含む。
{}　削除された akṣara を含む。
∨　行の上に挿入されたことを示す。
∧　行の下に挿入されたことを示す。

Īśvarapratyabhijñāvimarśinī

C

*(1b/01)oṃ śrīsvasty astu śaṅkarāya namaḥ śrīgaṇādhipataye
*(1b/02)namaḥ oṃ nirāśaṃsāt pūṇād aham iti purā bhā
*(1b/03)sayati yad dviśākhām āśaste tad anu ca vibhaṅktuṃ
*(1b/04)nijakalām svarūpād unmeṣaprasaraṇanime
*(1b/05)ṣasthitijuṣas tad advaitaṃ vande paramaśivaśaktyā
*(1b/06)tma nikhilam | śrītraiyambakasadvaṃśamadhyamu
*(1b/07)ktāmayasthiteḥ śrīsomānandanāthasya vijñāna
*(1b/08)pratibimbakam anuttarānanyasākṣipumartho
*(1b/09)pāyam abhyadhāt īśvarapratyabhijñākhyaṃ
*(1b/10) yat sunirmalam tatpraśiṣyaḥ karomy etāṃ tatsūtravi
*(1b/11)vṛtiṃ laghum buddhvābhinavagupta haṃ śrīmallakṣma
*(1b/12)ṇaguptataḥ | vṛttyā tātparyaṃ ṭīkayā tadvicāraḥ
*(1b/13)sūtreṣv eteṣu granthakāreṇa dṛbdham tasmāt sūtrārthaṃ
*(2a/01)mandabuddhīn pratītthaṃ samyag vyākhyāsye pratyabhijñā
*(2a/02)viviktyai | sarvatrālpamatau yad vā kutrāpi
*(2a/03)sumahādhiyi na vānyatrāpi tu svātmany eṣā syā
*(2a/04)d upakāriṇī |

Ch

*(1b/1) oṃ svasti śrīgaṇeśāya namaḥ oṃ namaḥ śivāya ||
*(1b/2) oṃ nirābhāsāt pūrṇād aham iti purā bhāsayati yad dviśā
*(1b/3)khām āśaste tad anu ca vibha ∨<?> ktuṃ nijakalām svarūpā
*(1b/4)d unmeṣaprasaraṇanimeṣasthitijuṣas tad advaitaṃ vande parama
*(1b/5)śivaśaktyātma nikhilam || śrītraiyambakasadvaṃśamadhya
*(1b/6)muktāmayasthiteḥ śrīsomānandanāthasya vijñānaprati
*(1b/7)bimbakam anuttarānanyasākṣipumarthopāyam abhyadhāt
*(1b/8)īśvarapratyabhijñākhyaṃ yaḥ śāstraṃ yat sunirmalam tatpraśiṣyaḥ
*(1b/9)karomy etāṃ tatsūtravivṛtiṃ laghum | buddhvābhinavagupto haṃ
*(1b/10)śrīmallakṣmaṇaguptataḥ | vṛttyā tātparyaṃ ṭīkayā tadvi
*(1b/11)cāraḥ sūtreṣv eteṣu granthakāreṇa dṛbdham tasmāt sūtrā
*(1b/12)rthaṃ mandabuddhīn pratītthaṃ samyag vyākhyāsye pratyabhijñāvivi
*(1b/13)ktyai sarvatrālpamatau yad vā kutrāpi sumahādhiyi na vānya
*(1b/14)trāpi tu svātmany eṣā syād upakāriṇī

J

*(1b/1)oṃ namo vighnahantre | oṃ namaḥ śivāya gurave | śrīrāmabhadrāya namaḥ | oṃ nirāśaṃsāt pūrṇād aham i
*(1b/2)ti purā bhāsayati yad dviśākhām āśāste tad anu ca vibhaṅktuṃ nijakalām svarūpād unmeṣa-prasaraṇanimeṣa
*(1b/3)sthitijuṣas tad advaitaṃ vande paramaśivaśaktyātma nikhilam 1 śrītraiyambakasadvaṃśamadhya-muktāmayasthi
*(1b/4)teḥ śrīsomānandanāthasya vijñānapratibimbakam 2 anuttarānanyasākṣipumarthopāyam abhyadhāt īśva
*(1b/5)rapratyabhijñākhyaṃ yaḥ śāstraṃ yat sunirmalam 3 tatpraśiṣyaḥ karomy etāṃ tatsūtravivṛttiṃ laghum buddhvābhi
*(1b/6)navagupto haṃ śrīmallakṣmaṇaguptataḥ 4 vṛttyā tātparyaṃ ṭīkayā tadvicāraḥ sūtreṣv eteṣu grantha-kāreṇa dṛ
*(1b/7)bdham tasmāt sūtrārthaṃ mandabuddhīn pratītthaṃ samyag vyākhyāsye pratyabhijñāviviktyai 5 sarvatrālpamatau yad vā
*(1b/8)kutrāpi sumahādhiyi na vānyatrāpi tu svātmany eṣā syād upakāriṇī 6

Jh

*(1b/1)oṃ
*(1b/2)namo gaṇapataye
*(1b/3)oṃ svasti || śrīmattripurabhairavyai namaḥ ||
*(1b/4)oṃ nirābhāsāt pūrṇād aham iti purā bhā
*(1b/5)sayati yad dviśākhām āśāste tad anu ca
*(1b/6)vibhaṅktuṃ nijakalam | svarūpād unmeṣa

*(1b/7)prasaraṇanimeṣasthitijuṣas tad advaitaṃ va
*(1b/8)nde paramaśivaśaktyātma nikhilam | śrī
*(1b/9)traiyambakasadvaṃśamadhyamuktamayasthiteḥ |
*(1b/10)śrīsomānandanāthasya vijñānapratibimbaka
*(1b/11)m | anuttarānanyasākṣipumarthopāyam a
*(1b/12)bhyadhāt | īśvarapratyabhijñākhyaṃ yaḥ śāstraṃ yat su
*(1b/13)nirmalam | tatpraśiṣyaḥ karomy etāṃ tatsūtravi
*(2a/1)vṛtiṃ laghum | buddhvābhinavagupto 'haṃ śrīma
*(2a/2)llakṣmaṇaguptataḥ | vṛttyā tātparyaṃ ṭīkayā
*(2a/3)tadvicāraḥ sūtreṣv eteṣu granthakāreṇa dṛbdha
*(2a/4)m tasmāt sūtrārthaṃ mandabuddhīn pratītthaṃ samya
*(2a/5)g vyākhyāse pratyabhijñāviviktyai | sarvatrālpa
*(2a/6)matau yad vā kutrāpi sumahādhiyi | na vā
*(2a/7)nyatrāpi tu svātmany eṣā syād upakāriṇī |

Ṭh

*(1b/1)śrīgurave śivāyoṃ namaḥ | śrīgaṇanāthāya namaḥ | namaḥ sarasvatyai |
*(1b/2)oṃ nirāśaṃsāt pūrṇād aham iti purā bhāsayati yad dviśākhām āśā
*(1b/3)ste tad anu ca vibhaṅktuṃ nijakalām ∧ <|> svarūpād unmeṣaprasaraṇanime
*(1b/4)ṣasthitijuṣas tad advaitaṃ vande paramaśivaśaktyātma nikhilam ||
*(1b/5)śrītraiyambakasadvaṃśamadhyamuktāmayasthiteḥ | śrīsomānandanāthasya vijñā
*(1b/6)napratibimbakam | anuttarānanyasākṣipumarthopāyam abhyadhāt |
*(1b/7)īśvarapratibhijñākhyaṃ yaś śāstraṃ yat sunirmalam | tatpraśiṣyaḥ karo
*(1b/8)my etāṃ tatsūtravivṛtiṃ laghum | buddhvābhinavagupto haṃ śrīmallakṣmaṇagu
*(1b/9)ptataḥ | vṛttyā tātparyaṃ ṭīkayā tadvicāraḥ sūtreṣv eteṣu granthakāreṇa
*(1b/10)dṛṣṭam tasmāt sūtrārthaṃ sūkṣmabuddhīn pratītthaṃ samyag vyākhyāsye pratyabhijñā
*(1b/11)viviktyai || sarvatrālpamatau yad vā kutrāpi sumahādhiyi |
*(1b/12)na vānyatrāpi tu svātmany eṣā syād upakāriṇī |

Ḍh

*(1b/1)oṃ vighnahantre namaḥ śivasvarūpāya gurave namo namaḥ śrīḥ
*(2a/2)nirāśaṃsāt pūrṇād aham iti purā bhāsayati yad dviśākhām āśā
*(2a/3)ste tad anu ca vibhaṅktuṃ nijakalām svarūpād unmeṣaprasaraṇa
*(2a/4)nimeṣasthitijuṣ{o}as tad advaitaṃ ∨<vande> paramaśivaśaktyātma nikhila
*(2a/5)m 1 śrītraiyambakasadvaṃśamadhyamuktāmayasthiteḥ śrīsomā
*(2a/6)nandanāthasya vijñānapratibimbakam 2 anuttarānanyasākṣi
*(2a/7)pumarthopāyam abhyadhāt īśvarapratyabhijñākhyaṃ yaḥ śāstraṃ yat suni
*(2a/8)rmalam 3 tatśipraśiṣyaḥ karomy etāṃ tatsūtravivṛttiṃ laghum
*(2a/9)buddhvābhinavagupto haṃ śrīmallakṣmaṇaguptataḥ 4 vṛttyā tātparyaṃ ṭī

*(2a/10)kayā tadvicāraḥ sūtreṣv eteṣu granthakāreṇa dṛbdham tasmāt sū
*(2a/11)trārthaṃ mandabuddhīn pratītthaṃ samyag vyākhyāsye pratyabhijñāviviktyai 5
*(2a/12)sarvatrālpamatau yad vā kutrāpi sumahādhiyi na vānyatrāpi tu
*(2a/13)svātmany eṣā syād upakāriṇī 6

Īśvarapratyabhijñāvimarśinīvyākhyā

No. 2103, Government Oriental Manuscript Library, Madras.

*(1/1)|| īśvarapratyabhijñāsūtravimarśinīvyākhyā ||
*(1/2)nāmarūpātmakaṃ viśaṃ yasya līlāyitaṃ vapuḥ |
*(1/3)prakāśāya namas tasmai savimarśāya śambhave ||
*(1/4)iha viśvānujighṛkṣāparaḥ paramaśiva eva sakalabhūmaṇḍalottare śrīmacchā
*(1/5)[???]divya krīḍāsadane śrīkāśmīradeśe śrīnarasaṃhaguptasahadharmacāvi
*(1/6)[???āṃ] śrīmatyāṃ vimalāyāṃ līlayāvatīrya śrīmadabhinavaguptanātha iti
*(1/7)[pra]khyātābhidhāto nikhilarahasyāmnāya sārabhūtaṃ śrītraiyambakasantānacū
*(1/8)[???]maṇi śrīmadutpaladevācāryamukhodgītaṃ śrīmadīśvarapratyabhijñākhyaṃ śā
*(1/9)[straṃ] vyācikhyāsuḥ svavyākhyānasya niṣpratyūhaparipūraṇāya tacchāstrasā
*(1/10)[ra]bhūtāṃ parāṃ devatāṃ samāviśyānugrāhyajanasamāneśārthaṃ stutiparāmarśapūrvam a
*(1/11)[bhi]mukhīkaroti – nirāśaṃsād ityādinā ||
*(1/12)[ya]t aham iti pūrṇān nirāśaṃsāt unmeṣaprasaraṇanimeṣasthitijuṣaḥ sva
*(1/13)[rūp]āt nijakalāṃ purā dviśākhām ābhāsayati tad anu tām eva vibhaṅktum āśa
*(1/14)[s]te ca tat paramaśivaśaktyātma nikhilam advaitaṃ vande ity anvayaḥ |
*(1/15)yat kila śrītriṃśikāśāstre{m} –
*(1/16)anuttaraṃ kathaṃ deva sadyaḥ kaulikasiddhidam |
*(1/17)yena vijñātamātreṇa khecarīsamatā vrajet ||
*(2/1)etadguhyaṃ mahāguhyaṃ ka[tham asya] mama prabho |
*(2/2)[????e] sā tu yā śaktiḥ kauli[k]ī kulanāyi[kā] ||
*(2/3)tāṃ me kathaya deveśa yena tṛpti[ṃ] vrajāmy aham |
*(2/4)[iti???????] devī praśnam avatārtha
*(2/5)śṛṇu devi mahābhāge uttarasyāpy anuttaram |
*(2/6)kauliko 'yaṃ vidhir devi mama hṛdvyomn[??????taḥ] ||
*(2/7)ityādinā sarvatan[tr]e[ṣ]u sarvadā ity antena granthena prativacanam arpayatā bhaira
*(2/8)[veṇa] catu[rda]śāyutam ity atroddhṛtya etad anantaram ∨<??e>anyāc cāra ityādinā tasyaiva
*(2/9)sarvasiddhivibhūtisamudayatvam upavarṇitam |
*(2/10)evam anuttarabhaṭṭārikātmakaparabhairavayāmalavācakībhūtaṃ mahā
*(2/11)phalapradaṃ hṛdayabījam asmin śāstrāvatāra etan nāyoginījāta ityādi sarva
*(2/12)jñatvam avāpyata ityantena jīvanmuktivibhūtyātmaka parāparasiddhihetubhūta
*(2/13)m anuttarabhaṭṭārakaparābhaṭṭārikātmakabhairavayāmalavācakībhūtaṃ hṛdayabīja
*(2/14)m ālocitam | tad atra śrīmadīśvarapratyabhijñāśāstravyākhyānaṃ bha

*(2/15)yapāder bhaṅ[???]ntareṇa prakaṭīkṛtam | tad yathā yad ityanenānuttaram | ni
*(2/16)jakalām iti visargaśaktiḥ unmeṣaprasaraṇetyādi caturdaśasva [???] | nikhila
*(2/17)m ity anena sadvṛttirūpaviśvam | etac ca śāstrakārair adhikāracatuṣṭaye rahasya
*(2/18)[bhā]ṣayā tadabhihitam | kathaṃ tatra +++++ nimeṣalakṣaṇena
*(2/19)saṃkocavikāsātmanā jñānakriyālakṣaṇena svabhāvena svaparisyandana[sāra]
*(2/20) eva na tu pariniṣṭhitapariclinnajaḍasvarūpaghaṭāditulyaḥ tas[ya ca] saṃko
*(3/1)[ca]vikāsayogaḥ trikoṇa hṛdayaparispandanādiṣu yathā yathā sphuṭībhava
*(3/2)++++++++++++ bhairavasaṃvidi yathā yathā sanyūnībhavati
*(3/3)tathā tathā tannikṛṣyate yāvaj jaḍe pāṣāṇādau sa ca saṃkocavikāsalakṣaṇo '
*(3/4)pi sargasvātantryātmā bhagavato 'nuttarasya śaktir iti laghu{pa}∨<vṛ>ttyukta[???]yena
*(3/5)[jñ]ānakriyādhikārābhyāṃ bindudvandvātmikā visargaśaktirā+++
*(3/6)++ rūpa[??]tmanā prathamenā hi ke∨<te>na sadvṛttipramātṛtatva{??}nirūpaṇātmanā
*(3/7)dvitīyenāhnike∨<te>na triśūlaṃ sarvadhātvantarālīnetyādinānuttaram ityadhikā
*(3/8)[ri] catuṣṭayāntarhṛdayabījasvarūpaṃ spaṣṭaṃ draṣṭavyam |
*(3/9)iha hi etaddhṛdayabījam evācāryair ahamkamahāma++++
*(3/10)ktam | asya mahāmantrasya | ∨<ā>dyantāntargatānantaśaktiviśrāntinirbharām |
*(3/11)nuccāryām ahaṃvācam adhīye hṛdayaṃ prabhoḥ ||
*(3/12)ādyantāntargatānantavācyavācakanirbharam |
*(3/13)rahasyaṃ mantramudrāṇāṃ prapadye 'ham anuttaram ||
*(3/14)[sa]ha iti śrīparyantapañcāśikopakramopasaṃhāraślokoktanītyā ādyama
*(3/15)[??]ram anuttaram
*(3/16)visargo 'yam athātyarthaṃ sphuṭo 'bhūt sṛjyavistarāt |
*(3/17)etatsṛṣṭātmaśaktīnām itaretaramiśraṇāt ||
*(3/18)bhavatkṣobhāntaraṃ nāsmād visargād bāhyato bhavet ||
*(3/19)[i]ti nītyā ca | akārādihaārāntākṣaravargaḥ pañcadhā saceti tantrasa
*(3/20)[dbh]āvoktanītyā cāntyabhūto hakāro visargaḥ am ity atra bījau triśūlasa
*(4/1)dvṛttī draṣṭavye | kathaṃ tadbrahma paraṃ śuddhaṃ | śāntam abhinnātmakaṃ samaṃ sakalaṃ
*(4/2)amṛtaṃ satyam śāntau viśrāmyati bhāsvararūpāyām iṣyata iti {cet ya}∨<vedya>ta
*(4/3)iti saṃpādyata iti ca bhāsva<ra>rūpeṇāmarāmṛṣṭaṃ sad api ∨<tu> nabhaḥ prasūnatvam abhye
*(4/4)tīti paramārthasārokta prakāreṇecchājñānakriyātmakaṃ triśūlam eṣaṇīyajñeya
*(4/5)kāryātmakasadvṛttirūpaṃ vedyarāśiṃ svīkṛtya tad etad vedyavedanavedakaviśrānti
*(4/6)trayamayaṃ varṇatrayasya rūpam iti śrīlaghuvṛttyuktanītyā svayam api vedanātmaka
*(4/7)tvād viśvavedyāvibhāgavedanātmā bindur iti śrīsāmbavyākhyānoktanītyā
*(4/8)viśvavedyāvibhāgavedanātmani svopari vartini bindau viśrāmyatīty asya
*(4/9)bindostriśūlasadvṛttimayatvam | kiṃca hṛdayasya mūlabhāge sadvṛttirūpe
*(4/10)vedyāṃśe jāgrat svapnasuṣuptyātmakātisphuṭasphuṭāsphuṭabhedatrayaśālini sa
*(4/11)rvathā sanmātrāprathamakalāvapuṣi viśrāmyāj vṛttāv uttararūpāyāṃ śaktiśiva
*(4/12)tatvāntakrameṇa turīyapadaparyantaṃ viśrāntena kramabhinnasamasta∨<ta>tv{e}asvīkaraṇā
*(4/13)d āsanavyāptiḥ pradarśitā bhavati iti śrīlaghuvṛttidṛṣṭyā sad vṛttitriśūla

*(4/14)yor api vedyarāśimayatvāt kṣityādiśivāntavedyāvibhāgavedanarūpe bi
*(4/15)ndau viśrāntiḥ
*(4/16)vedyaṃ svakramasiddhāvittimanupraviśadaṅgaviṣayādyam |
*(4/17)iti śrīvirūpākṣapañcāśikoktanītyā yuktaiveti hṛdayabījasya sahāmangrā
*(4/18)ntarbhāvaḥ | vastuvṛttyā tu
*(4/19)āmūlātaḥ kramāt jñeyā kṣāntādṛṣṭir udāhṛtā | iti |
*(4/20)avarṇastho yathā varṇa[ḥ]sthitaḥ sarvagataḥ priye | iti |
*(5/1) aṣtatriṃśat paraṃ dhāma yatraitadviśvakaṃ sphuret | iti |
*(5/2)sārṇena tritayaṃ vyāptaṃ triśūlenaturīyakam | iti |
*(5/3)[??to]visa{rgi}rgātmikā ṣoḍaśī bhairav{ī}ātmikā yāvat sarvottīrṇaturīya
*(5/4)[spṛ]giṣyat iti | akāro vaisarvāgiti śrītantram asat | bhāvatantravaṭa
*(5/5[dhā]nikāmālinīvijayalaghuvṛ∨<ttiśru>tyuktanītyānuttaravisargayor bhairavayā
*(5/6)[??]layor akārādikṣakārāntavācakakṣityādiśivāntavācyasamuttīrṇatvā
*(5/7)[??]hāmantradaśottīrṇatvam | tathāpy anayor api mātṛkāta evāntarbhāvātta
*(5/8)[??]tṛkāmūlabhūtamahāmantramayatvam apy asty eva | kiṃ bahunā – mahāmantra
*(5/9)ti vimarśo hi viśvākāreṇa viśvaprakāśanena viśvasaṃhāreṇa vā kṛtrimā
*(5/10)m iti sphuraṇam ityupanyāsanītyā
*(5/11)tau mātṛmā +++ti meyamayārthagarbhau
*(5/12)mātaḥ śive śivapitaḥ śaraṇaṃ śraye vām |
*(5/13)[?]ti śrīsūktāvalyuktanītyā ca tayoḥ parāmṛṣṭarūpayor anuttaraparābhaṭṭā
*(5/14)[??]kayoḥ svātmaśivādikṣityantaviśvakroḍīkārako 'ham iti parāmarśaḥ |
*(5/15)[??]d uktaṃ śrītantrāloke ++++++ sargātmaśivaśaktyadvayā
*(5/16)[???]ni | parāmarśo nirbharatvād aham ity ucyate prabhoḥ ||
*(5/17)[nī]tynenaivāśayenādāvaham iti prayuktaḥ itīti evaṃbhūtena mahāma
*(5/18)[??]ṇa pūrṇāt bharitāt | pūrṇatvaṃ nāma śivādikṣityantaviśanirbharatvam ākā
*(5/19)[??]ṇīyam aparaṃ yena +++++ nā dvitīyasya yuktaṃ yat paripūrṇatā |
*(5/20)[??]ti śrīmatstotrāvalyuktanītyā nirāśaṃsād unmeṣetyādinā navaratajaḍa
*(6/1)grahmavādivilakṣaṇasṛṣṭyādipañcavidhakṛtyakāritvam uktam | tatronme
*(6/2)ṣaḥ sṛṣṭiḥ prasaraṇaṃ sthitinime +++++++ hau gṛ
*(6/3)hyete |
*(6/4)cidātmaiva hi devo 'ntaḥ sthitam icchāvaśād bahiḥ |
*(6/5)yogīva nirupādānam arthajātaṃ prakāśayet ||
*(6/6)iti vakṣyamāṇanītyā ataḥ saṃvidaikyena sthitasvabhāvarāśer bahir unma
*(6/7)jjanarūpatvād unmeṣasya gṛ ++++++++ ti hetutvāt
*(6/8)prasaraṇasya sthititvaṃ bahīrūpatāvilāpanenāntarnimajjanātmakatvānnime
*(6/9)ṣasya saṃhāratvaṃ saṃhṛtasya bhāvarāśer antaḥ saṃskārātmanāvasthāpakahetu
*(6/10)tvāt sthites tirodhā{dha}namayatvaṃ tādṛśasya bhāvarāśeś ci +++++++
*(6/11)+++++taranugrahātmatvaṃ ca yadi vā unmeṣetyādi sthitītyantena ke
*(6/12)valaṃ sṛṣṭisaṃhārāv abhidhīyete | tato nmeṣaprasāraṇety anena sṛṣṭiḥ nime

*(6/13)ṣasthitīty anena saṃhāraḥ | sthitivilayānugrahāṇāṃ viśi ++++++
*(6/14) ++++tvāt nādhikyam iti pralayodayābhyām eva pañcavidhaṃ pārameśvaraṃ kṛtyaṃ
*(6/15)saṃgṛhyate | śrīspandanirṇayoktanītyā sthititirodhānānugrahās tv anayo
*(6/16)s tv anantarbhūtā eva | tatra sṛṣṭyantargatā sthitiḥ saṃhārāntargatau tirodhā
*(6/17)nānugrahau | anena | yasyonmeṣanimeṣābhyāṃ jagataḥ pralayodayau |
*(6/18)taṃ śakticakravibhavaprabhavaṃ śaṅkaraṃ stumaḥ ||
*(6/19)iti śrīspandakārikārthasaṃgṛhītasvarūpād ātmīyāt avināśinorūpya
*(6/20)māṇasya kāryarūpaviśvasya kāraṇa{rūpā}∨<bhūtā>t śaktirūpāt yo viśvajīvita
*(7/1)mayo bhagavat prakāśaḥ | iti śrīsūktāvalyuktanītyā prakāśanād bhāvāt |
*(7/2)atha ca –
*(7/3)nijadharmiṇaṃ svarūpaṃ prakāśayantī prakāśyavargasya | iti
*(7/4)iti śrīvirūpākṣapañcāśikoktanītyā svaṃ svātmanaḥ prakāśarūpaṃ prakāśya
*(7/5)sya viśvasya rūpayantīti vā svarūpaṃ tādṛśāt |
*(7/6)sarvajñaḥ sarvakartā ca vyāpakaḥ parameśvaraḥ |
*(7/7)sa evāhaṃ śaivadharmā iti dārḍhyācchive{bhave}t |
*(7/8)iti śrīvijñānabhairavoktasthityā sarvajñatvādiyuktāt svarūpāt | nijaka
*(7/9)lām iti nijāṃ sahajāṃ
*(7/10)śaktiśaktimator yasmād abhedaḥ sarvadā sthitaḥ |
*(7/11)atas taddharmadharmitvāt parā śaktiḥ parātmanaḥ ||
*(7/12)śaktiś ca śaktimadrūpādvyatirekaṃ na vāñchati |
*(7/13)tādātmyam anayor nityaṃ vahnidāhikayor iva || iti ||
*(7/14)ananyāpekṣitā yasya viśvātmatvaṃ prati prabho |
*(7/15)tāṃ parāṃ prati bhāṃ devīṃ saṃgirante hy anuttarām |
*(7/16)akulasyāsya devasya kulaprathanaśālinī |
*(7/17)kaulikī sā parā śaktiraviyukto yayā prabhuḥ ||
*(7/18)[te] śrīvijñānabhairavaprabodhapañcadaśikātantrālokasthityā svāviyuktam |
*(7/19)[??]ca yāsmiṃ sthiteḥ yad udeti līyate a tattatpūrvāparabhāgavyāpi | yathā
*(7/20)[???]vaṅkara iti vakṣyamāṇa{??}nītyā viśvapūrvāparakoṭivyāpitvān nityāṃ svā
*(8/1)tmano +++ bhedanaṃ kṣepo bhedeti tasyāvikalpanam |
*(8/2)jñānaṃ vikalpaḥ saṃkhyānamanyato vyatibhedanāt |
*(8/3)gatisvarūpārohitvaṃ pratibimbavad eva yat
*(8/4)nādasvātmaparāmarśaśeṣatā{??}tad vilāpanāt |
*(8/5)iti pañcavidhām enāṃ kalanāṃ kurvatī parā ||
*(8/6)devī kālī tathā kālakarṣaṇī ceti cocyate |
*(8/7)iti tantrālokanītyā pañcavidhakṛtyakāriṇīṃ sṛṣṭimayīṃ svātantryaśaktiṃ |
*(8/8)pureti antaḥsthitasya bahiravabibhāsayiṣāyāḥ prathamam | dviśākhām iti –
*(8/9)dviśākhātvaṃ nāma svāntaraham ity aikātmyenaṃ viśvasyāham idam idam aham iti
*(8/10)śrīsadāśiveśvarocitāntarāyamāṇāṅkuritedantāpratītiḥ tadvatī | anutta
*(8/11)raṃ svayam ekam eva sat svāviyuktatvād ekām api satīṃ svātantryeṇa dvidhārūpāṃ

*(8/12)prakāśayati | bhāsanaṃ nāma ātmānam ata evāyam iti vakṣyamāṇanītyā bhā
*(8/13)sakasyānuttarabhaṭṭārakasya svātantryāt tattadrūpatayā sphuraṇam | tad anv iti —
*(8/14)dviśākhām ābhāsānantaraṃ tām eva nijakalāṃ vibhaṅktuṃ mantravijñānākala
*(8/15)pralayākalasakalapramātṛtatprameyavargātmanārūpeṇaprakāśayitum | āśāste
*(8/16)icchati ca | āśāsanaṃ nāma | tiṣṭhāsor evam icchaiva hetutā kartṛtā kriyā |
*(8/17)iti vakṣyamāṇanītyāicchāyāḥ viśvanirmāṇarūpakriyāparyantībhāvaḥ | ā
*(8/18)bhāsayati āśāstuṃ ity ekakartṛkatvadyotakena samuccayārthena ābhāsana
*(8/19)śakti{????}∨<vima>rśanabījāvasthāpa +++++panatas tāni pañcavidhakṛtyāni
*(8/20)karotīti śrīpratyabhijñāhṛdayoktanītyā ābhāsanādiśabdavācyeṣu sṛṣṭyā
*(9/1)dikṛtyasya sarvasya svātmana eva kartṛtvaṃ | na tu brahmādivat ekaikasmin
*(9/2)pratiniyate kṛtyaviśeṣa itye tat dyotitam | +++++ vibhāgāśāsa
*(9/3)mayor avyavadhānatvaṃ ca | ābhāsayati āśāste ceti ca vartamānaprayo
*(9/4)geṇa tad idaṃ śakticakram avicchinnaprabandhaṃ bhagavato bhairavanāthasyeti
*(9/5)[???]dyuvṛttyuktanītyā aviratamābhāsanādikartṛtvaṃ darśitam | tad iti sa ++
*(9/6)+++ paramaśivaśaktyātmanilhilam iti – icchādiyuktaṃ para
*(9/7)śivasvarūpatvaṃ dviśā∨<khā>m ābhāsanena śaktyātmakaṃ vibhā ++++ tadadvai
*(9/8)tam iti anante tāvad ākārasvīkāre 'py ekalakṣaṇāṃ tāṃ svasaṃvidam āviśya
*(9/9)vikalpān na ++++++++ kokta{nītyā}dṛṣṭyā śivāda
*(9/10) ++++++ tad ekaghanasvarūpā | kiṃ ca advaitam iti –
*(9/11)yatra tejāṃsi tejāṃsi tamāṃsi ca tamāṃsy alam |
*(9/12)tejāṃsi ca tamāṃsy eva +++++ jyotir anuttaram ||
*(9/13)iti śrīlaghuvṛttyuktanītyā ++++++++++++++++ram |
*(9/14)śivaś cidānandaghanaḥ paramākṣaravigrahaḥ ||
*(9/15)[?ti] vakṣyamāṇanītyā svavācakabhūtarahasyākṣarābhinnatayā arūpaṃ vi
*(9/16)[??]ttīrṇaṃ tadantargataviśvabahirbamanagrasanaśīlatayādvaitaṃ viśvamayam | atra
*(9/17)[??]m ity adhyāhāryam | vande iti vadi abhivādana ++++
*(9/18)+++kṛṣṭatvena parāmarśanīyaḥ |
*(9/19)atha sarvāvasthāsu sphuradrūpatvād abhivadat abhimukhyena
*(9/20)svarūpaṃ vimṛśat tatsamarthācaraṇena nityodya tā prayatnenābhivādaye
*(10/1)svarūpaparāmarśaniṣṭhaṃ tatsaṃmukhīkaroti | tatra smṛtir nā +++++++
*(10/2)tatsaṃmukhīkaraṇam abhivādanam iti saṃkṣepataḥ ślokārthaḥ ||

文献と略号

1 一次文献

Bh Bhāskarakaṇṭha. *Bhāskarī*: K. A. Subramania Iyer and K. C. Pandey ed. *Īśvarapratyabhijñāvimarśinī of Abhinavagupta*. 2 vols., Allahabad: The Princess of Wales Sarasvati Bhavana. 1938, 1950. Reprinted, Delhi: Motilal Banarsidass. 1986.

ĪPK Utpaladeva. *Īśvarapratyabhijñākārikā*. See Torella [2002].

ĪPKV Utpaladeva. *Īśvarapratyabhijñākārikāvṛtti*. See Torella [2002].

ĪPV Abhinavagupta. *Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*: (1) Mukund Ram Shastri ed., 2 vols. KSTS 22, 33. Bombay: Nirṇaya Sagar Press. 1918, 1921. (2) See Bh.

ĪPVV Abhinavagupta. *Īśvarapratyabhijñāvivṛttivimarśinī*: Madhusudan Kaul Shastri ed., 3 vols. KSTS 60, 62, 65. Bombay: Nirṇaya Sagar Press. 1938, 1941, 1943.

TĀ Abhinavagupta. *Tantrāloka*: Madhusudan Ram Shastri ed., KSTS 23, 28, 29, 30, 35, 36, 41, 47, 52, 57, 58, 59. Bombay: Nirnaya Sagar Press, Tattvavivecaka Press, Sri Venkateshvara Steam Press, Allahabad: Indian Press, 19181930.

TĀV Jayaratha. *Tantrālokaviveka*. See **TĀ**.

2 二次文献

Pandey, Kanti Candra.

1954. *Bhāskarī*, vol. III, *Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*, English Translation. The Princess of Wales Sarasvati Bhavana Texts No. 84. Reprinted, Delhi: Motilal Banarsidass, 1986.

1963. *Abhinavagupta*. An Historical and Philosophical Study. Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Ofice. 2nd.ed. [1st.ed. 1935, 3rd. ed. 2000]

Raghavan V.

1981. *Abhinavagupta and His Works*. Chaukhambha Oriental Research Studies No. 20. Varanasi: Chaukhambha Orientalia.

Sanderson, Alexis

2005. "A Commentary on the Opening Verses of the Tantrasāra of Abhinavagupta." In *Sāmarasya: Studies in Indian Arts, Philosophy, and Interreligious Dialogue in Honor of Bettina Bäumer*, pp.89148. Ed. by Sadananda Das and Ernst Furlinger. New Delhi: D.K. Printworld.

2007. "The Śaiva Exegesis of Kashmir." In *Melanges tantriques a la mémoire d'Hélène Brunner*, pp. 231-442 and 551-582(bibliography). Ed. by Dominic Goodall and André Padoux, Pondhichery: Institut Français d'Indologie.

Slaje, Walter

1993. *ŚĀRADĀ*: deskriptivsynchrone Schriftkunde zur Bearbeitung kaschmirischer SanskritManuskripte: Auf der Grundlage von Kuśalas GhaṭakharparaGūḍhadīpikā und unter graphischer Mitwirkung von Eva Slaje. Reinbek: Dr. Inge Wezler, Verlag für Orientalistische Fachpublikationen.

Torella, Raffaele

1988. "A Fragment of Utpaladeva's Īśvarapratyabhijñā-vivṛtti." *East and West* 38, pp. 137-174.

2002. *The Īśvarapratyabhijñākārikā of Utpaladeva with the Author's Vṛtti*. Critical Edition and Annotated Translation. II ed., Delhi: Motilal Banarsidass, 2002. [I ed. Serie Orientale Roma 71. Roma: IstitureItaliano per il Medio ed Estremo Oriente, 1994]

高島　淳

1986. 「カシミール・シヴァ派における upāya と śaktipāta の体系」『宗教研究』270: 55–84.

（かわじり　ようへい、　筑紫女学園大学人間文化研究所客員研究員）